

大学一年生の英作文にみられる

Avoidance Behavior

松山東雲短期大学 森 千鶴

1. はじめに

Avoidance Behavior とは、ある外国語の学習者がある特定の用法を意識的あるいは無意識的に避ける行動をいう。このことに関する主な研究として、Schacter (④)、Schacter & Hart (⑤) などがある。Schacter & Hart (⑤)は、Arabic, Chinese, Japanese, Persian, Spanish の5つの言語グループについて大規模な調査をしており、たとえば自由英作文においてアラビア語話者は他のグループに比べて受け身形を使わない。また、日本人や中国人は関係代名詞を使わないなどの調査結果を報告している。

このような Avoidance Phenomenon は学習者の持つ中間言語のひとつの特色として非常に興味深い。本稿では、こうした Avoidance の実態や Avoiders の特色、またその原因を考察し、母国語が学習者の言語に与える影響などを再検討してみたい。

2. 原語話者との比較による Avoidance の実態

先に述べた Schacter & Hart (⑤: 39)によると、日本人は関係代名詞の Avoiders であるという結果がでている(表1)。

表1 Comparison of Language group means with grand means

RELATIVE CLAUSES					
Subject (grand mean = 1.83)		Object (grand mean = 0.68)		Oblique Object (grand mean = 0.19)	
Language:	Deviation:	Language:	Deviation:	Language:	Deviation:
Persian	0.53	Persian	0.21	Persian	0.21
Arabic	0.18	Spanish	0.21	Spanish	-0.03
Spanish	0.09	Arabic	0.03	Chinese	-0.03
Japanese	-0.36	Chinese	-0.15	Arabic	-0.06
Chinese	-0.44	Japanese	-0.31	Japanese	-0.10

Schacter & Hart (5: 39)

(下線は筆者のもの)

しかし、この結果は再検討を要する。なぜならこれはあくまで5つの言語グループ間の相対的な比較であり、原語話者と比べたものではないからである。また「使わない」のではなく、もともと良く解っていないで「使えない」場合が含まれていることも考えられる。

その点でより信頼性が高いと思われるのは竹蓋(⑦: 122-126)の調査方法であろう。竹蓋は日本人によって書かれた英作文と、原語話者(native)のものとを比較し、比率によってその差を明らかにしている。たとえば分詞の用法についていえば、書かれた文章の中から分詞の出現回数をそれぞれ調べ、出現率に換算し、さらに日本人を1とした場合の比率として表わしている(表2)。この方法であれば、単に「使う」「使わない」の問題だけでなく、どの程度の割合で使わないかも明らかになる。

表2 関係詞節に相当する分詞 (例: The gentleman speaking to the major is my uncle.)

	原 語 話 者	日 本 人	比 率
	<i>Linda's Adventure</i>	College Students' Diary	
調査された文の総数	423	1,761	8 : 1
出 現 回 数	14	7	
出 現 率 (%)	3.3	0.4	

竹蓋 (⑦: 125)

竹蓋はこの方法で「完了形」と「分詞」に関する調査を行ない、日本人によってあまり使われない語法が存在することを明らかにしているが、「関係代名詞」についてはふれていない。そこで、竹蓋の方法にならって「関係代名詞」に関する調査を行なうことにした。Schacter & Hart (⑤) が言うように、日本人学生は関係代名詞を避けるかどうか、避けるとすればどの程度の割合で避けるのか、またさらに Avoidance の主な原因となっているものは何かなどを明らかにするためである。

- ① 対象：松山東雲短期大学英文科の1年生39名。39名にしぼったのは次のような理由による。まず、ある語法を「使っていない」という場合、知っているのに使えない場合と知らないから使えない場合の2通りが考えられる。ここで意図しているのは前者、すなわち「知っているのに使わない」場合に限られる。そこで、まず関係代名詞に関する基本的な文法テストを1年生79名に課し、そのテストで60%以上得点した学生39名を被験者とした。
- ② 方法：夏休みの宿題として全員に課した 'English and I' と課する自由英作文 (300語程度) のうち、先に述べた39名のもを抽出し、総文数と関係代名詞の数を調べる。その際、error もその数に含める。同じ方法で原語話者によって書かれた *Linda's Adventure* における関係代名詞の出現率を調べ、その数値を比較する。(*Linda's Adventure* は、18才のアメリカ人女性が書いた日本滞在日記という形式を取っており、日本人むけのテキストとして出版されている。原語話者のサンプルとしてこれを選んだ理由は、竹蓋にならったということもあるが、何より学生と同年代の女性が書いたものということで、内容的にも構文的にも無理がなく適当と思われた。)

関係代名詞を実験群だとすると、これと比較するための統制群が必要となる。ここでも竹蓋の方法を参考にして、受け身形の出現頻度を統制群とした。

- ③ 結果：調査の結果は表3の通りである。

表3 関係代名詞の出現率

	原 語 話 者	日 本 人	原 : 日
調査された文の総数	423	1,090	3.5 : 1
出 現 回 数	78	57	
出 現 率	18.4 %	5.2 %	

まず、原語話者における関係代名詞の出現率は18.4%、一方、日本人学生においては5.2%であり、これをさらに日本人を1として比を出すと3.5 : 1ということになる。つまり日本人が1回関係代名詞を使う間に、原語話者は約3.5回使うということである。統制群の受け身形については1.4 : 1であるから、関係代名詞は確かにあまり使われていないということがわか

る。しかもこれは error をも含めた数であるから、error を除いたものだけを考えればその差はより大きくなると思われる。

3. 文法知識と Avoidance Behavior

日本人学生が関係代名詞を好まず、あまり使わないという結果が得られたので、次にその原因について考えてみたい。むしろ「難しいから使わない」に違いないのだが、一口に「難しい」と言っても、母国語の影響とは関係のない言語構造それ自体の難しさと、母国語との隔りの大きさによる難しさの2通りが考えられる。そして関係代名詞の場合は、この両方が影響していると思われる。この原因の一端を探るために、どのような学生が特に avoid しているかを調べてみることにした。まず単純な発想で、関係代名詞のテストがあまり良くできていないものほど avoid しているのではないかと考えてみた。つまり、関係代名詞それ自体が持つ構造的難しさを十分に理解していないこと、それによる「自信のなさ」が Avoidance を引き起こすのではないかと考えてみた。

そこで事前に課した関係代名詞のテスト成績によって、被験者39名をさらに上位群と下位群に分類し、Avoidance の状況を調べることにした。関係代名詞のテストは20点満点で、39名の平均点は14.2点であった。そこで14.2点以上の学生16名を上位群、14.2点以下の学生23名を下位群として分類した。まずはじめに調査したのは出現率の相違についてである(表4)。表4に見られるように、上位群では関係代名詞の出現率5.5%、下位群では4.9%であった。数字の上では上位群の方が少し上回るが、両者の有意差検定を行なってみ

表4

	総文数	出現回数	率
上位群 (16)	483	27	5.5%
下位群 (23)	607	30	4.9%

ところ、統計的には有意差がないという結果が得られた(CR = 0.461 < 2.58)。

表5

	総人数	使用者数	率
上位群	16人	10人	62.5%
下位群	23人	13人	56.5%

次に関係代名詞を用いている人数という側面から調べてみた(表5)。上位群では16名中10名が関係代名詞を使用しており、下位群では23名中13名が使用していた。

比率の上では62.5%と56.5%というように、ここでも上位群がやや上回っているが、統計的には有意差は認められなかった(CR = 0.375 < 2.58)。すなわち、この2つの側面の調査から言えることは、Avoidance Behavior は文法的知識の多い少ないに関わりなく起こることである。

4. おわりに

Avoidance Behavior の原因のひとつとして、「それ自体が持つ構造的難しさ」をとりあげ調査した結果、文法的知識の多少やそれに関連する自信のあるなしは、Avoidance の直接原因にはなっていないらしいという結論を得た。関係代名詞の知識を多く持っている学生でも同じように avoid するという現象に着目すれば、むしろ難易の問題ではなく、それ以前に用法そのものが「頭に浮かんでこない」と考えるのが妥当であるように思われる。つまり、母国語の用法とは大きく隔っているために、いつ、どのような場合に使ったらよいか解らないままにすぎてしまっているのではないかと思う。Avoidance Behavior の原因は関係代名詞そのものの構造的難しさとい

うより、むしろ母国語との隔り (distance) がもたらす影響がもっと大きいということがわかった。たしかに後置修飾という方法を持たない日本人にとって、関係代名詞は心理的抵抗の大きいもののひとつであろう。

このように、母国語の影響は誤用という形で表面に現われるものばかりではない。母国語との隔りがすべて difficulty につながるわけではないが、今回の関係代名詞のように知識はあっても学習者の中に容易に定着しないものもあることが明らかになった。これはどのような種類のものかといえば、竹蓋 (⑦: 123) の言葉を借りれば、「日本語の語法にない語法、日常生活であまり気にしていない事象を表現する語法」ということになるであろう。母国語が学習者に与える影響はこのように多種多様である。Interlanguage の研究をすすめる上では、表面に現われる誤用のみならず、こうした隠れた部分の現象も見逃してはならないと思われる。

対照言語学が必ずしも学習者の困難点を予測しないということが検証されるにつれて、母国語の干渉ということはあまり取り沙汰されなくなっているようである。しかし、Avoidance Behavior という現象を見る限りにおいて、母国語の影響は軽く片づけてしまえるものではなさそうである。学習者の困難点は、母国語とは関係のない言語構造それ自体の複雑さが原因になる場合もあれば、今回調査した関係代名詞のように、母国語との隔りの大きさによって引き起こされる心理的抵抗が原因になる場合もある。そして Rutherford (③: 92) が述べているように、言語構造の複雑さと心理的抵抗の大きさは必ずしも一致するとは限らず、研究の余地があると思われる。

今後は、不定詞や分詞も含めた後置修飾語法に対して、日本人学正がどのように対処してゆくかを調べ、母国語が学習者に与える影響などをさらに追求してゆきたい。

〔参考文献〕

- 1 Corder, S. P. (1981), *Error Analysis and Interlanguage*. London: Oxford University Press.
- 2 Jordens, P. (1980), "Interlanguage Research: Interpretation or Explanation," *LL*, 30, 1, pp. 195-207.
- 3 Rutherford, W. (1982), "Markedness in Second Language Acquisition," *LL*, 32, 1, pp. 85-107.
- 4 Schachter, J. (1974), "An Error in Error Analysis," *LL*, 24, 2, pp. 205-214.
- 5 ----- & B. Hart (1979), "An Analysis of Learner Production of English Structures," *Georgetown University Papers on Languages and Linguistics*, No. 15, pp. 18-75.
- 6 岩原信九郎 (1979), 『教育と心理のための推計学』(第23版) 東京: 日本文化科学社。
- 7 竹蓋幸生 (1982), 『日本人英語の科学』 東京: 研究社